

えほんたいこうき

絵本太功記

〔解説〕

寛政十一年（一七九九）大坂豊竹座初演。近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒の合作による全十三段の時代物です。豊臣秀吉の出世物語であるいくつかの「太閤記」を下敷きに、明智光秀が主君織田信長を討った本能寺の変から、光秀が秀吉に討たれるまでの十三日を十三段にあてはめて描いています。中でも十段目「尼ヶ崎の段」は俗に「太十（たいじゅう）」と呼ばれこの作品を代表する名場面となっています。登場人物の名称は仮名手本忠臣蔵同様、幕府の検閲から逃れるために変えて書かれています。

〔あらすじ〕

主君尾田春長（織田信長）の横暴な振る舞いを諫めたことにより、領地没収となった武智光秀（明智光秀）は、本能寺に夜襲をかけ春永を討ちます。備中高松城を攻めていた春長家臣真柴久吉は取って帰して光秀討伐となります。

光秀の母さつきは、主君を討った光秀に立腹しており、家臣の四王天田島頭や光秀の妻操の願いも入れず、一

人尼ヶ崎に転居してしまいます。光秀は母の心に感じ自刃しようと思しますが、四王天と息子十次郎に諫められ、改めて天下取りの戦へと向かいます。

〈夕顔棚の段〉

尼ヶ崎のさつきの閑居に、操と十次郎の許婚初菊が訪ねてきて、さらに一夜の宿を借りに来た旅の僧が風呂を沸かしています。その様子を光秀がうかがっています。十次郎も出陣の許しを得にやってきて、発菊と祝言をあげることとなります。

〈尼ヶ崎の段〉

十次郎は初菊と祝言をあげ戦場へ向かいます。すると最前から様子をうかがっていた光秀が現れ、旅の僧を真柴久吉と見破り襖越しに刺しますが、そこにいたのは母さつきでした。敗戦の様子を告げに戻ってきた十次郎は深傷に息を引き取り、光秀と久吉は他日の決戦を誓って別れるのです。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

夕顔棚の段

唱えける

御法の声も媚きし尼ヶ崎の片ほとり。誰が住む家と夕顔も、おのがまゝなる軒の棲。あたり近所の百姓ども、茶碗片手に高咄し。

「ノウ婆様、こな様も見たところが、上方で歴々のお衆さうなが、なんのために面白うもないこの在所へはござつたぞいの」

「ア、コレ／＼甚作、そりや言やんな。京の町は武智という悪人が、春長様を殺して大騒動。大方また下へ下つてゐやしやる久吉殿が戻つて来て、武智と是非に一合戦なけりや済まぬわいなう」

「そんなら年寄りほうか／＼京の町にはゐられぬ。とかく危げのないやうにこんな在所へ来てゐるが、

大出来大出来。時に近づきがてら妙見講を勤めるとはよい手廻し、大きな馳走に逢ひました。これから随分お心安ういたしませう、サア／＼いなう」

と口々に、言ひたい事をたくしかけ、喋り廻つて帰りける。

老母はつどつど門送り、庭の千草に打ち水も、保つ葉ごとに風かをる。軒を目当てに来る人は、武智が閨に咲く花の、操の前は家来を遠ざけ、嫁の初菊伴うて、窺ふ切戸の庭先に、花に心を養う老女。それと見るより手をつかへ、

「後室様の見舞ひとして、たゞ今参上いたせし」と懇懃に相述ぶる、詞に老女は打笑み、

「ヲ、珍らしい嫁女、孫嫁。遥々の道ようこそようこそ。さりながら倅光秀、当月二日本能寺にて、主君を害せし無法者、同じ館に膝並ぶるも、先祖の恥辱

身の穢れと、館を捨てゝこの在所へ、身退きしこの
婆を、見舞ひとはをこがましい。善にもせよ悪にも
せよ、夫につくが女の道、操の前は武智十兵衛光秀
が妻、そなたはまた十次郎光義が嫁でないか。生死
分らぬ戦場へ、赴く夫を打捨てゝ浮世を捨てた姑に、
孝行尽すは道が違ふ。妻城に留つて、留守を守るが
肝要ぞや。モウ寡婦暮しの楽しみに、夕顔棚の下
涼み、捨つべきものは弓矢ぞ」

と、言ひ放したる老女の一徹、後は詞もなかりけり。
常の氣質と逆はず、

「いかさま後室様の仰つしやるとほり、この様に
たゞお一人ござつたら、何もかも気散じで、マア第
一はお身の養生。今から私も初菊も、後室様のお傍
にゐて、飯も焚いたり茶も沸かし、お宮仕へをせう
ぞいの」

と、あり合ふ前垂打掛の、上に引き締め茶釜の傍、花
香の籠もる姑の、渋々機嫌を取兼ねる。娘心に初菊
も、マどう済むことか濁り井の、深き奇縁の釣瓶繩、
『水汲み上げん』と立寄れば。

「コレ／＼嫁たち。シテ孫十次郎は城に残つてゐめ
さるか」

「さればでござります。十次郎が願ひには、『どうぞ
今日の軍に、高名手柄が現はしたいと、父上までは
願ひしかど、婆様のお赦しなきに出陣するも本意で
なし。母に取次ぎしてくれ』と、くれぐれの願ひゆゑ
あまり健気さ、祖母様に御機嫌の程いかゞぞと、窺
ひに参りました」

と語るうち、老母は涙をはら／＼と流し、

「ヲ、うるさの嫁が物語り。主を討つたる逆賊の邪
非道の軍の評定、聞くが厭さのこの住居。ガまた孫

を誉めるではなけれども、非道な倅光秀が子に、十次郎といふ武士が、生れて来るとはこれも因縁、悔んで返らず。戦場のこと聞きたうない。アイや〜情けなの浮世や」

と、無量の思ひ百人の数珠爪繰つてゐたりけり。

折ふし表へ草鞋がけ、風呂敷背にいつきせき、蛙飛込む道野辺の、清水結ばん夏の旅、西行もどきの僧一人、門口に立休らひ。

「諸国修行の一人旅。近頃申し兼ねたれど、お宿の報謝に預りたし。押しつけながら」

と言ひ入るる、声を老母が聞き取つて、

「見苦しうござりますれど、お心置きなう御二宿」

「それは千万忝ない。さやうならば御遠慮なしに、御免々々」

とあがり口、腰打ちかくれば二人の女、草鞋の紐を

解きかくれば

「ア、勿体ない〜、構うて下さりませぬ。旅しつめた坊主の気散じ、木納屋の隅でもついころり。蚊帳も蒲団も入りませぬ。お心遣ひ御無用」

と、詞なかばへ表口、人目を忍びたど一騎、窺ひ立聞くと、武智光秀、『心得がたき旅僧』と、生垣押分け差覗き、思はず見合す母の顔、老母は何か心にうなづき、
「ヲ、わしとしたことが心のつかぬ、コレ御出家様、この板囲ひがすなはち風呂場、水は幸ひ汲んであり、ついぼや〜と燃して、暑い時分ぢや行水して休んで下さりませ。婆も後で相伴しませう」

「ア、イヤそれには及びませぬど、相伴とあれば沸しませう。そんなら御免なされませ」
と、包み引下げ気散じに、湯殿をさして入りにける。

味方の軍卒両手をつき、

「御子息十次郎光義様。『後室様に御願ひの筋あり』
と、只今これへ御越し」

と言ふ間ほどなくしづくと、家来に持せし鎧櫃舁
き入れさせて打ち通り、

「コリヤく者ども、そちたちに用事はない。陣所
へ早く」

と追つ立てやり、威儀を正して両手をつき、

「母様を以て御願ひ申せし出陣、御聞き届け下され
なば、武士の本意」

と十次郎、思ひ込んでぞ願ひける。老母は見るより
機嫌顔、

「才、珍らしい十次郎、出陣の願ひとな。倅を見限

りこの所へ身退きしに丁寧な願ひの筋。最前嫁女に
詳しく聞きました。とても出陣しやるなら、祖母が

願ひはこの初菊、今宵この家で祝言の盃してから門

出しや。なんと嫁女嬉しいか」

と、老ひの詞に初菊は飛立つばかり気もいそぐ、

心の悦び穂に出づる、顔は上気の夏楓、色も媚くば
かりなり。たゞ黙然と十次郎、『今日初陣に討死と、

覚悟極めしこの体。お暇乞ひに参りしと、知らせ給
はぬ悲しや』と、涙呑込み忍び泣き。操の前も立上りが
り、

「祖母様の御機嫌の変らぬうちに固めの盃」

「ヲ、それ、孫も大方心せき、操は九献の用意しや。

十次郎が初陣の、鎧の役はすぐに花嫁」

三国一の悲しみと、知らぬ白齒の孫嫁が、手を引連
れて三人は奥の

尼ヶ崎の段

一間に入りにけり。

残る荅の花一つ、水上げかねし風情にて、思案投げ
首しをるゝばかり、やう／＼涙押しとどめ、

「母様にも祖母様にも、これ今生の暇乞ひ。この身の願ひ叶ふたれば、思ひ置く事さらになし。十八年
がその間御恩は海山かへがたし。討死するは武士の習ひと思し召し分けられて、先立つ不孝は赦してたべ。二つにはまた初菊殿、まだ祝言の盃をせぬが互ひの身の幸せ。わしが事は思ひ切り、他家へ縁づきして下され。討死と聞くなれば、さこそ嘆かんと不便や」

と、孝と恋との思ひの海、隔つ一間に初菊が、立ち聞く涙転び出で、『わつ』とばかりに泣き出だせば、『は

つ』と驚き口に手を当て、

「ア、コレ声が高い初菊殿。さては様子を」

「アイ、残らず聞いてをりました。夫の討死遊ばすを、妻が知らないでなんとせう。二世も三世も女夫ぢやと思つてゐるに情けない。盃せぬが幸せとは、あんまり聞こえぬ光義様。祝言さへも済まぬうち、討死とは曲がない。わしやなんぼうでも殺しはせぬ。思ひ留つて給はれ」

と、縋り嘆けば

「ア、コレ、こなたも武士の娘ぢやないか。十次郎が討死はかねての覚悟。祖母様に泣き顔見せ、もし悟られたら未来永々縁切るぞや」

「エ、」

「サア、とかう言ふうち時刻が延びる。その鎧櫃よろいびつこゝへ、こゝへ」

「アイ、アイ」

「サ早う。時延びる程不覚のもと。エ、聞分けな
い」

と叱られて、

「いとしい夫が討死の、門出の物具つけるのが、ど
う急がるゝものぞいの」

と泣く／＼取り出す緋緘ひわたしの、鎧の袖に降りかゝる、

雨か涙の母親は、白木かわらけに土器白髪すねあての婆、長柄の銚子

蝶花形、門出を祝ふ熨斗のし昆布、結ぶは親と小手躰すねあて当、

六具かたむる三々九度、この世の縁や割小ざね、猪

首くびに着なす鍬形くわがたの、あたり眩ゆきいでたちは、さは

やかなりしその骨柄。

「フ、あつぱれ武者ぶり勇ましゝ。高名手柄を見る

やうな、祝言と出陣を一緒の盃。サア／＼はやう、め

でたい／＼嫁御寮」

と、悦ぶ程なほいや増す名残り『こんな殿御を持ち

ながら、これが別れの盃か』と、悲しき隠す笑ひ顔、

「随分お手柄高名して、せめて今宵は凱陣を」

と、跡は得言はず喰ひしぼる、胸は八千代の玉椿、散

りて果敢はかなき心根を察しやつたる十次郎、包む涙の

忍びの緒、絞りかねたるばかりなり。哀れをこゝに、

吹き送る、風が持て来る攻め太鼓、気を取り直し、

つゝ立ち上り、

「いづれもさらば」

と言ひ捨てゝ、思ひ切つたる鎧の袖、行方知らずな

りにけり。